

フィリピンから川砂調達

宮崎で2工場が標準化

宮崎県の生コン2工場（岡崎組、北辰運輸）がフィリピン産の川砂を標準化する。西工場は、港湾工事でこの川砂を使用した生コンを出荷する予定だ。全国的に骨材の安定

調達が問題となっていて、宮崎県の生コン工場が主な細骨材として使用している県外産の海砂の規制強化が進んでいることを受け、宮崎県生コンクリート工業組合（木田正美理

専務）は、新たな骨材の調達先を検討していた。こうした中、同工組は石垣島で使用されているフィリピン産の川砂に着目。昨年度に

出し港となるルソン島北部にあるフィリピン・オンリ港を訪問して、川砂の採取体制や品質などを確認した。調査団が帰国後、宮

崎港で骨材を扱っている商社と交渉して、生コン工場ではこれまでも川砂業者から提供を受けたサンプルで試験練りを行っていた

が、実物の入荷を受け、標準化に向けた準備を進めている。川砂の品質は絶対密度が2・59g/cm³で、吸水率が2・09%、実積率は61・4%。微粒分量が少ない

ため、2工場は既存の細骨材から30%程度代替して、6月13日に第1便（約6000トン）を入港させた。

課題はコスト
輸入川砂の問題はコストである。積出側は、川砂採取業者がフライベートバースを保有しており、3万トクラスの船舶も入港できる（木田理事長）が、宮崎港で骨材を荷揚げする場所は水深が浅く、大型の船舶が入港でき

ない。組合員の骨材安定調達を後押しするため、同工組は宮崎港を管理する宮崎県に対して、港湾計画に記されている「岸壁の整備（水深マイナス9・0m）」の早期着工を求めていると考えた。

また、同工組は港湾工事に使用した後、宮崎県コンクリート研究所の中澤隆雄所長（宮崎大学名誉教授）の指導を受けながら、現場打設の品質管理強化の

ため、超音波による非破壊試験を行い、硬化コンクリートの品質を追跡調査する考え。6月に共同試験場で超音波試験機を購入した。

標準化する工場は当面2工場のみだが、追跡調査の結果や宮崎港の整備状況を踏まえ、「1万トクラスの船舶が入港できればコストもかなり安くなる。他工場でも標準化する動きが広がる」（同）と見込んでいる。